文部科学大臣賞

天国のお父さんから届いた、家族を守る愛の形

福井県　永平寺町　松岡中学校　二学年

阿部　龍仁

僕が小学一年生のとき、船員として働いていたお父さんが突然、心不全で亡くなった。お父さんは日本の海を走るタンカーの機関長だった。一度仕事に出ると三カ月は帰ってこない。だからこそ、三カ月ぶりの休みでお父さんが家に帰ってくる日は、僕の家では特別なお祭りのようだった。いつもは静かな家の中が、お父さんの大きな笑い声でいっぱいになる。そんな優しくて頼もしかったお父さんが、ある日突然、もう二度と家に帰ってこなくなってしまった。お母さんが声を上げて大泣きしている姿を見て、当時の僕はわけが分からなくて、ただものすごく怖くて悲しかったことだけは、今でもよく覚えている。家を支えてくれていたお父さんを失い、僕とお母さんの二人だけの生活が始まった。

当時の僕はまだ小さくて何も分からなかったけれど、中学二年生になった今、振り返ると不思議に思うことがある。それは、お母さんと僕が、なぜあの大変な状況から今日まで普通に生活ができて、僕が学校に通い続けることができたのか、ということだ。お父さんが亡くなった後、お母さんがおばあちゃんの介護を一人でしていて、介護は本当に大変でお母さんは外へ働きに出ることさえできなかった。家に入ってくるお金がなくなってしまった僕たちは、いつ生活ができなくなってもおかしくない、本当にギリギリの状態だったはずだ。それなのに、なぜ僕たちは困らずに生活できたのだろう。

その理由を、最近になって教えてもらった。お父さんはもしものときのために、生命保険に入ってくれていたのだ。

それまで僕にとって生命保険という言葉は、テレビのＣＭで見かけるだけの、自分とは関係のないものだと思っていた。でも、僕の家にとって生命保険は、お父さんがいなくなった後の僕たちの生活をずっと支えてくれる、本当に大切なものだった。もし、お父さんが保険に入っていなければ、お母さんは外に働きに出られない中で、おばあちゃんの介護のお金や僕の学費のことで悩んで、きっと生活がめちゃくちゃになっていただろう。

お母さんは、「お父さんが保険を遺してくれたから、働きに出られなくても、お金の心配をせずにおばあちゃんの介護とあなたを育てることに集中できたんだよ。お父さんは、いなくなってもずっと私たちを守ってくれていたんだね。」と、話してくれた。その言葉を聞いたとき、胸がぎゅっと熱くなった。三カ月間も船に乗っている間、きっとお父さんはエンジンのあるものすごく暑くてうるさい

部屋の中で、命がけで僕たちのために働いてくれていた。そして、万が一のときのことまで考えて、毎月保険料を払ってくれていたのだ。それはただのお金ではなく、遺される僕たちへの『何があっても絶対に守る』というお父さんの深い愛情そのものだったのだと気づいた。生命保険とは、大切な人がいなくなった後も、その人の代わりに家族を守り続ける〝優しさ〟なのだと思う。

また、学校の授業で、保険はたくさんの人が少しずつお金を出し合って、困っている人を助ける「助け合い」の仕組みだと習った。お母さんが働きに出られない中でも僕たちが生活を続けられたのは、お父さんの愛だけでなく、会ったこともない多くの人たちが支え合っている仕組みのおかげでもある。誰かが困ったときにみんなで支え合う社会の温かさを知り、感謝の気持ちでいっぱいになった。

今、中学二年生になった僕には、どうしても叶えたい夢がある。それは、亡くなったお父さんと同じ「船員」になることだ。将来、僕が大人になって船員になったときには、お父さんが僕にしてくれたように、大切な人をしっかりと守れる男になりたい。そして、社会の助け合いへの感謝を忘れず、誰かを支えられる存在になりたい。家族から受け継いだ海への愛と、生命保険が教えてくれた大切な人への愛を胸に、僕は自分の道を切り拓いて行く。